



表1 アンメット・メディカル・ニーズに対する熊薬の研究状況 (2014年6月現在)

アルツハイマー病	大槻純男教授 <small>(微生物薬学)</small> 、塚本佐知子教授 <small>(天然薬物学)</small> 寺沢宏明教授 <small>(構造生命イメージング)</small>
CKD(慢性腎臓病)・ 糖尿病合併症 (腎症・網膜症・神経障害)	P8 甲斐広文教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small> 、丸山徹教授・渡邊博志准教授 <small>(薬剤学)</small> 平田純生教授・門脇大介准教授 <small>(臨床薬理学)</small> 、糸昭苑教授 <small>(幹細胞制御学)</small> 齋藤秀之教授・城野博史准教授 <small>(臨床薬物動態学)</small> 中川和子教授・猿渡淳二講師 <small>(薬物治療学)</small>
がん(悪性新生物)	P5-6 塚本佐知子教授 <small>(天然薬物学)</small> 、大槻純男教授 <small>(微生物)</small> 山縣ゆり子教授 <small>(機能分子構造)</small> 、丸山徹教授・渡邊博志准教授 <small>(薬剤学)</small> 濱田哲暢教授 <small>(腫瘍治療・トランスレショナルリサーチ学)</small> 城野博史准教授 <small>(臨床薬物動態学)</small> 、森岡弘志教授 <small>(生命分析化学)</small> 有馬英俊教授・本山敬一准教授 <small>(製剤設計学)</small> 大塚雅巳教授 <small>(生体機能分子合成学)</small> 、土屋創健講師 <small>(薬学生化学)</small>
うつ病・統合失調症 などの難治性精神疾患	P9-10 高濱和夫教授 <small>(創薬研究センター GIRK創薬研究)</small> 香月博志教授 <small>(薬物活性学)</small> 、中川和子教授・猿渡淳二講師 <small>(薬物治療学)</small>
多発性硬化症などの 免疫関連疾患	甲斐広文教授・首藤剛准教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small> 、杉本幸彦教授 <small>(薬学生化学)</small> 池水信二准教授 <small>(機能分子構造)</small> 、塚本佐知子教授 <small>(天然薬物学)</small> 有馬英俊教授・本山敬一准教授 <small>(製剤設計学)</small>
COPD(慢性閉塞性 肺疾患)	甲斐広文教授・首藤剛准教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small> 丸山徹教授・渡邊博志准教授 <small>(薬剤学)</small>
AIDS(後天性免疫 不全症候群)	三隅将吾教授 <small>(環境分子保健学)</small> 、藤田美歌子准教授 <small>(創薬研究センター)</small>
脳出血	香月博志教授 <small>(薬物活性学)</small>

表2 難病に対する熊薬の研究状況 (2014年6月現在)

NPC (ニーマンピック病C型)	P7 入江徹美教授・石塚洋一講師 <small>(薬剤情報分析学)</small> 、中瀧直己教授 <small>(資源開発)</small> 有馬英俊教授・本山敬一准教授 <small>(製剤設計学)</small> 、香月博志教授 <small>(薬物活性学)</small> 甲斐広文教授・首藤剛准教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small>
GM1 ガングリオシドシス	有馬英俊教授・本山敬一准教授 <small>(製剤設計学)</small>
FAP(家族性アミロイド ポリニューロパチー)	有馬英俊教授・本山敬一准教授 <small>(製剤設計学)</small> 、甲斐広文教授・ 首藤剛准教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small> 、城野博史准教授 <small>(臨床薬物動態学)</small>
CF(嚢胞性線維症)	甲斐広文教授・首藤剛准教授 <small>(遺伝子機能応用学)</small>
強皮症	大塚雅巳教授 <small>(生体機能分子合成学)</small>

図1 治療満足度と薬剤貢献度



た。しかしそれでもなお、アンメット・メディカル・ニーズの領域にとどまる疾患は存在しています。瘵がんや肺がん、アルツハイマー病やうつ病・統合失調症などの精神疾患、糖尿病合併症(腎症・網膜症・神経障害)やCKD(慢性腎臓病)などがこれに当たります。

そのような疾患に対する治療薬開発のため、製薬会社はもちろん、大学をはじめとした各研究機関が日々研究を重ねています。熊本大学薬学部(熊薬)も例外ではありません。熊薬は創立129年の歴史を持ち、30の研究分野(研究室)からなる全国最大級の薬学の教育・研究組織の一つであり、多くの研究者がアンメット・メディカル・ニーズの領域にある疾患の治療薬開発を目指し、研究に取り組んでいます(表1)。

ここで忘れてはならないのが、図1には現れてこないものの、「治療の満足度」も「薬剤の貢献度」も低い疾患が他にもあるという事実です。いわゆる「難病」と呼ばれる疾患群のことで、患者数が非常に少ないがゆえにアンメット・メディカル・ニーズとしては認識されることはありませんが、有効な治療薬が存在しないという意味において、これらも医療ニーズの高い疾患群とみなすことができます。そして、難病に対しても、熊薬では多くの研究がなされています(表2)。